

日本の伝統文化を考える

『ならど 檜戸流綱火つなび からみる綱火つなび の保存』

筑波大学 人文・文化学群 1年

宮本 大翔

目次

梗概	35	(2) 現代の綱火	48
第1章 はじめに	35	(3) 高岡流綱火演目詳細	48
第2章 檜戸流綱火	37	(4) 保存への取り組み	48
(1) 檜戸流綱火の消失までの経緯		第3節 葛城流綱火	
(2) 復活させる目的と手法		(1) 葛城流綱火の起こり	
(3) 檜戸流綱火 復活に向けた調査		(2) 現代の綱火	
(4) その他の調査と考察		(3) 葛城流綱火演目詳細	
第3章 茨城に残る3つの綱火	41	(4) 保存への取り組み	
第1節 小張松下流綱火	41	第4章 宮本流綱火	51
(1) 小張松下流綱火の起こり		(1) 宮本流綱火の起こり	
(2) 現代の綱火		(2) 宮本流綱火の技法	
(3) 小張松下流綱火演目詳細		第5章 まとめ	57
(4) 保存への取り組み		参考・引用文献	59
第2節 高岡流綱火	45	掲載写真図表一覧	61
(1) 高岡流綱火の起こり			

## 梗概

私の地元茨城県つくばみらい市は、国指定重要無形民俗文化財の綱火つなびがある。戦国時代から400年以上続いており、大変歴史のあるものだが、知名度も低くまた現在後継者不足という問題にも直面している。

そこで今回この綱火を守る1つの方法が日本各地の伝統文化の継承の手助けになればよいと考えている。

綱火は現在、小張松下流おぼりまつした・高岡流たかおか・葛城流かつらぎの3つの流派があるのだがかつてはいくつもの流派があったのだった。しかし戦争や歴史の中で消滅してしまった。新型コロナウイルス感染症が流行し、綱火だけでなく各地の日本の伝統文化としての祭り行事が中止されている。そのため伝統や技の継承が上手くいっていない地区もあるようである。

綱火ならどは現在は消滅しており、映像資料はおろか、どのようなものだったかを伝える本なども全くと言っていいほどない。そこで住民の地域に対する誇りや愛着を高め、見物客などとの新たな交流を生み出し、地域創生や活性化につなげるためにも楢戸流綱火の復活をなすとげたいと感じた。また、なぜ消滅という悲劇が起こったのかを解明することにより、これが他の流派で起こらないようにするための方策を示していけるのではないかと考える。そこで他の流派の現状を記録、保存すると共に後継者不足になった場合の対策を示し

た。

既存の流派の現状を述べ、技術保存のために口伝えで代々伝わってきた複雑な綱の張り方を図示した。

しかし技術をテキストや図解などで記録できたとしても、楢戸流綱火のように人手不足で消滅してしまうのも、時間の問題である。

また、保存会の人数が減って、綱火の開催が困難になった時のための対策も講じていく必要がある。そこで、単独でも綱火を行うことができる方法を、私の研究と試行錯誤の末、宮本流綱火として導き出した。

## 第1章 はじめに

私は綱火保存会に加入し、綱火の歴史調査や綱火の保存自らの問題解決能力を使った綱火の改良をライフワークとしている。

綱火とは、戦国末期から戦勝祝いや豊作祈願として伝承されてきた伝統行事で、空中に綱を張り巡らせ、その綱を使って人形や船などを操り、人形芝居を演じるというものである。太鼓や笛のお囃子はやしに合わせて、人形が動きながら綱を伝い、仕掛花火が数々の演出を添える。現在このからくり人形劇の綱火は全国に3か所のみ残っており、すべてが茨城県南地区

である。

このような、歴史的価値が評価され、小張松下流、高岡流が1976（昭和51）年5月4日に第1回重要無形民俗文化財に指定された。

世界に目を向けるとあやつり人形劇や花火の文化はあるもののこれらの2つが融合したものは見受けられない。では、日本に目を向けてみるとどうかというと、琉球から渡来した三味線を伴奏に、あやつり人形を動かす人形浄瑠璃をはじめとする数多くの人形劇や、独自に発展した花火を使用した神事は数山々なれど、やはり2つが融合したものは、この綱火以外例がない。そのため、この人形劇に花火を融合させる特異性や特殊性が全国だけでなく、世界からも高い評価を得ている。

しかし、このような価値があるにも関わらず、今まで本格的な調査や研究が行われてこなかった。そのため、綱火に関する文献や古い資料は数少なく、地区の長老からの口伝えが頼りとなっており、早急に調査・保存しなければ、次世代に継承することが難しくなってくるのではという疑問を抱き、綱火について詳しく調査していこうと

考えた。

綱火は茨城県つくばみらい市の小張地区、高岡地区（旧伊奈町）、檜戸地区（旧谷和原村）、常総市の大塚戸地区（旧みつかいどう水海道市）の四カ所で行われていたが、つくばみらい市の檜戸流（旧谷和原村）は、昭和初期に消滅し、現在では、つくばみらい市の小張松下流、高岡流（旧伊奈町）、常総市の葛城流（旧水海道市）の三派が残っている。（図1、2参照）



図1

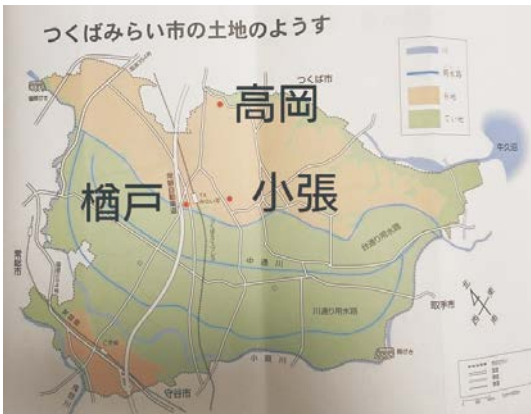


図2

## 第2章 檜戸流綱火

檜戸流綱火は、『小張松下流綱火』において、宮田は「隣村の谷和原の檜戸流綱火。(中略) 檜戸流からくりは、完全に消滅したままである。私が子どもの頃はすぐ近いところなので、見に行ったことを思い出す。関係した人は生存していないのだろうか、綱火の用具などは、どうなったことか」と述べている(宮田誠治『小張松下流綱火』1986, p.30, 31)。ここにある通り、現在は消滅しており、映像資料はおろか、どのようなものだったかを伝える本なども全くと言っていいほどない。

そこで私はこの檜戸流綱火がどのようなものであったかを調査し、消滅までの経緯をたどることにした。

### (1) 檜戸流綱火の消失までの経緯

#### ◎檜戸流綱火の起り

・東福寺の境内で行われていた。

・東檜戸地区の住民に聞き込み調査を行ったところ、「小張や高岡よりも昔から行われ、綱火の元祖であると言っていたことがある」という人もいた。もし、これが本当なら1600(慶長5)年以前かそれぐらいの時期に開始されたと推測できる。一方、東福寺の北島住職は、

「高岡地区はうちの檀家であるため、高岡流が境内で発表したのではないかと考えている。その場合、東檜戸で開始されたのは、高岡流より後の1613(慶長18)年以降と推測できる。」

#### ◎檜戸流綱火の消滅

・東檜戸地区の90代の女性と80代の男性が子供の頃に東福寺で綱火をやっていたのを見た記憶がある。また、他の流派も日支事変(1937年)が勃発してから戦時中は人手不足や灯火管制によって夜の行事ができなくなり、綱火は行っていなかったことから、日支事変が起こった1937(昭和12)年くらいまでは、行われたのではないかと推測できる。

### (2) 復活させる目的と手法

#### ◎目的

現在、国や県の無形民俗文化財に指定されている綱火の元祖である可能性があるため、さらに綱火というものを詳しく説明することができるかもしれない。また、綱火を復活させることで住民の地域に対する誇りや愛着を高め、見物客などの新たな交流を生み出し、地域創生や活性化につながられるのではないか。

◎手法

- ・文献などによる資料調査
  - ・行われていた寺社の特定
  - ・檜戸地区の住民並びに他の流派の人に聞く
- 資料調査や話を聞いたものから、どのようなものだったのかを考察し、再現を試みる。

(3) 檜戸流綱火 復活に向けた調査

① 先行の研究資料や刊行資料

- ・『小張松下流綱火』伝統芸能380年の歴史』において宮田は「隣村の谷和原の檜戸流綱火。(中略) 戸流からくりは、完全に消滅したままである。私がかどもの頃はすぐ近いところなので、見に行ったことを思い出す。関係した人は生存していないのだろうか、綱火の用具などは、どうなったことか」と述べている(宮田誠治『小張松下流綱火』1986, p.30, 31)。

・『伊奈の歴史 第3号』において大橋勘二は「この周

りといえば、今は途絶えてしまったけれど昔は東檜戸にも綱火があつて、ここにはうちから花火をもつて

いったりしていました」と述べている(伊奈町史編纂委員会・編集『伊奈の歴史 第3号』1997, p.64)。

② 現地調査

- ・檜戸地区の寺社(光明院、東福寺、鹿島神社、愛宕神社)を下見(2019 9/22)

↓小張地区や高岡地区と同様に、火の神を祀る愛宕神社があるためここで綱火が行われていたかと考えられるが、実際には愛宕神社の境内の様子(綱火を行うスペースがない)から実施することは難しいのではないかと推測。

③ 聞き込み調査

↓その後、イを読み、東檜戸と断定

a 東福寺の住職に東檜戸の綱火について聞く  
↓境内でやっていたのは間違いない、高岡地区はうちの檀家であるため高岡流が境内で発表したのではないかと推測。

地元の男性1人に東檜戸の綱火について聞く

↓祖父の代でやっていた

b 東檜戸地区の32軒に東檜戸の綱火について何か知っていることはないかと聞き込み調査したところ、21人に話が聞け、8件の有力な証言があった。

・大昔にやっていた

・東福寺から小張や高岡に伝わった

・東福寺でやっていたのは小張や高岡よりも前で、元祖であると聞いたことがある

・檜戸から小張に嫁に行った人がいて、小張で流行らせた

・子供会で櫓やぐらをかけてやった

・使った人形を観音様（東福寺の観音堂）のところに保管していたが、火事で燃えてしまった

・90代女性。子供の頃にやっていた記憶はあるが、どのようなものだったかは分からない、覚えていない。

・80代男性。小学校くらいまでやっていた気がするが、内容などは覚えていない。

・綱火の会場であった東福寺住職に下線部口、ハについて確認

・口について私は知らないのですが、相当昔ではないか。

・ハについては、観音堂は火災になったことはあったが、人形はなかった。私が見たことがあるのは、中をくりぬいた木に縄なわが巻かれていますものだけ。

↓花火を打ち上げる筒だと断定できる

・高岡流に聞けば分かるかも知れない

↓妙見寺みょうけんじ（明治時代まで高岡公民館のところにあった寺）消失により記録はない

・高岡流の副団長の大山さんに檜戸の綱火について聞く  
↓やっていたらしい

・小張松下流の家元の大橋さんに檜戸の綱火について聞く

↓初耳

・小張松下流綱火保存会会長の山口さんに檜戸の綱火について聞く

↓やっていたと聞いたことはあるが、分からない

#### ④電話調査

・本来ならば、東檜戸の祭りについて、1軒1軒聞き込みを行うところではあるが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため延べ45軒に電話での調査をおこなったところ、3件の有力な情報を得た。

##### 1件目

・3、4年前まで、集落の端から、花火（\*もろもろ）を持ち、太鼓を叩いて練り歩く

♪くりこみ♪と呼ばれる行事をしていた。

\*もろもろ：ゆっくりと長い時間燃える花火

##### 2件目

・7、8年前まで愛宕神社で花火を行っていた。

・若い人が太鼓を叩いた。

・道路に線香花火や爆竹をアーチ状に仕掛け、祭りのと

きに行った。

### 3件目

・1月（正月） はやし…若者が昼間に太鼓を叩き、  
大杉神社（稲敷市）のお札を各家に配る。

お面様めんさまと呼ばれるお面を家々で回す。

約30年前までは実施していたが、現在では、お札をくばり、新年会を飲食店で行うのみ。

・6月（田植え） はやし…太鼓を叩く。

約30年前までは実施していたが、現在は、おこなわれず。

・8月23日 愛宕神社祭礼…家々に灯籠を飾り、花火（もろもろ）を持ち、ぐりこみぐりこみを行う。

以前は花火を作っていたようだが、購入するようになった。

約10年前までは実施していたが、現在では、23日に愛宕神社の掃除をし、幟のぼりを立て、集会所で宴会を行うのみ。

・11月 鹿島神社祭礼…集落の田んぼで収穫した米を炊き、皆で食べる。

約10年前までは実施していたが、現在では、鹿島神社の掃除をし、幟を立て、集会所で宴会を行うのみ。

・以前は、小張松下流、高岡流で実施している、ぐりこ

みみが檜戸流綱火が消滅してからも行われていたが、太鼓を叩く若者がいなくなり、できなくなってしまうたそうだ。また、ぐりこみの用具などもほとんど残っていないそうだ。

### (4) その他の調査と考察

・明治初期の図3を見ると、東福寺が広大な土地を持っていたと分かる。そこには、現在の愛宕神社と集会所が含まれている。また、集会所は、現在も東福寺と同じ住所のため寺の所有となっている。そのため、記録がないので定かではないが、神仏習合政策がとられていた頃は、東福寺と愛宕神社が一緒になっていたとも考えることができる。

・通常ならば、古地図を見て、綱火が行われていた場所を発掘等で特定することができるが、伊奈・谷和原丘陵部開発事業により、公民館だけでなく愛宕神社までも移転（写真3）を余儀なくされ、番地等から考えられる旧所在地（写真1）も、調節池や住宅地となり形状が大きく変わり（写真2）、発掘や調査が不可能である。

調査の結果、お囃子や演目も分からず、近年まで残っていたのは、花火の筒のみであるため、檜戸の綱火がどのようなものだったのかをはっきりと特定するのは難しく、再現は事



写真2 現在



写真1 昭和後期



図3 明治初期



写真3 移転の石碑

実上不可能である  
とあきらめざるを得ない。

しかし、檜戸流  
綱火は後継者がいない  
ことで消滅した  
というのは、他の  
流派にも同じよ  
うな可能性があ  
り、早急に保存や  
対策が必要である  
ということが分  
かった。

### 第3章 茨城に残る3つの綱火

#### 第1節 小張松下流綱火

##### (1) 小張松下流綱火の起り

小張松下流綱火は、小張城主松下石見守重綱が1603  
(慶長8)年から1623(元和9)年の間に考案し、戦勝  
祝いや弔いのために陣中で藁人形の演技を行ったことがは  
まりとされている。

##### (2) 現代の綱火

現代の綱火は、8月24日に小張愛宕神社の境内で行われて  
いる。高さ8m〜10mの大柱三本を一定の間隔に立てて大綱  
や小綱を張りめぐらし、対面に人形を操作したり、お囃子を  
演奏したりするための櫓が設けられ、夜に仕掛花火を  
照明にして空中でのからくり人形劇がおこなわれる。

重綱が綱火のことを家臣である大橋吉左衛門に伝授  
したことから、現在に至るまで大橋家が代々家元とし  
て、小張松下流綱火保存会を結成し、守り伝えている。

8月23日 くりこみ

火祭りの行事のとして、綱火の前日に村の悪霊を追  
い払うために、花火を手に(写真4)小張の街道を山





写真4



写真5



写真6

車とともに練り歩き（写真5）、  
神社の階段を駆け上り（写真  
6）、境内に入り花火を奉納す  
る。

③ 小張松下流綱火演目詳細

・お囃子の種類…三番叟さんばそうばやし、松下ばやし、巫女舞みこまいばやし、くりこみばやし、

・演目の種類…

「二六三番叟」、大利根川おわたしねがわ  
の舟遊山ふなゆさん、「桃太郎鬼ヶ城おにがじょう

の戦い」、などを代表とし、20種類近くある。

① 「二六三番叟」（写真7）



写真8



写真7

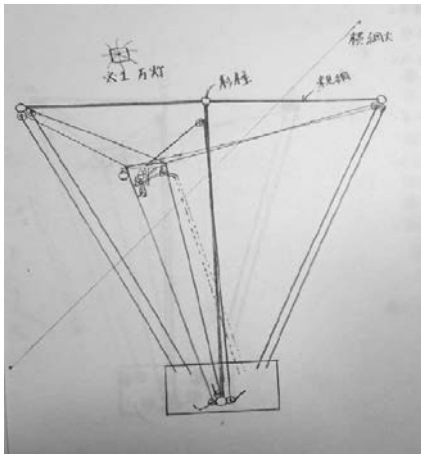


図4 綱の張り方、並びに花火の配置



写真9 上から見たもの

豊作祈願のために、常世とこよの国から来た呪い師まじないしを象かたどった人形  
が手足首を動かし、舞い踊る（写真8）。

綱の操作 8人

口上

（拍子木を鳴らす）

「トザイ 東西とうざい さてはや 一座高いちざんたしうには候さうらえども

不弁舌ふべんぜつなる口上をもつて申し上げ奉る

ここもと仕掛しかけたる綱操りの儀 豊年は万作 豊年は万

作 二六三番 二六三番

仕掛けたるには候へども 綱先のことならば 仕損しせんじの

程 平ひらにご容赦ようしゃ

もし満足とあらば 拍手喝采かっさいを願う 先ずはその為口上

おうさんや おうさんや 喜びありや 喜びありや 今

日の喜び他へはやらすと」

図4の\*1 万灯まんとう：雨乞あま乞いの意味合いがある。

## ② 「大利根川の舟遊山」

利根川に浮かぶ舟が火の神と出会い、2人の巫女みこが神がかりの状態となり、願いを乗せて、天高く舞う。(写真10、11)

綱の操作 8人

口上

(拍子木を鳴らす)

「トザイ 東西 さてはや 一座高うには候らえども  
不弁舌なる口上をもって申し上げ奉る



写真 10



写真 11

ここもと仕掛けたる綱操りの儀 【大利根川の舟遊び  
大利根川の舟遊山】

仕掛けたるには候へども 綱先のことならば 仕損じの  
程 平にご容赦

もし満足とあらば 拍手喝采を願う 先ずはその為口  
上」

\*以降は演目によって【】内を変える。

ここで「大利根川の舟遊山」の綱の張り方を用いて、小張  
松下流の人形の操り方を示す。基本的にはどの演目も同じ操  
り方である。番号は、図5を参照。

・舞台より人形を正面に出すとき

①④を強く引き、②③⑥は徐々に引き、⑤⑦は自然に緩  
める。

・中央からaの方へ

①②を引き、③④⑤⑥⑦は自然に緩める。

・aからbへ

②③を強く引くことで、人形がbの方を向く。

③④⑥を引き、①②⑤⑦は自然に緩める。

・bからcへ

③④を引き、①②⑤⑥⑦は自然に緩める。

・cから舞台へ

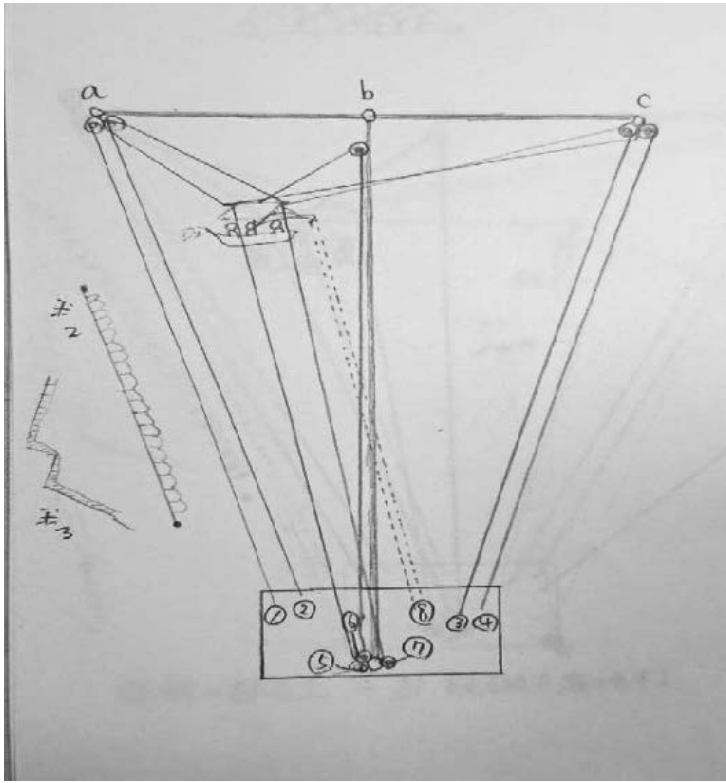


図5 網の張り方

- ③⑤を強く引くことで、人形が舞台の方を向く。
- ⑤⑦を引き、①②③④⑥は自然に緩める。
- ・舞台から正面へ
- 舞台に近くなつたとき、①⑤を強く引くことで、人形が正面に方向を変える。
- ⑧で手足首などを操作する。

演目中に行われる仕掛花火

図5の\*2 滝花火(写真12、図6)

綱に花火をたくさん付け速火線で一斉に点火する。

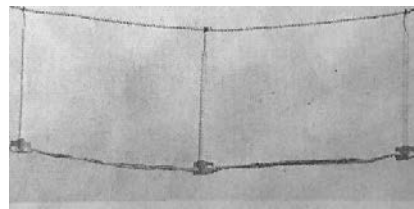


写真12

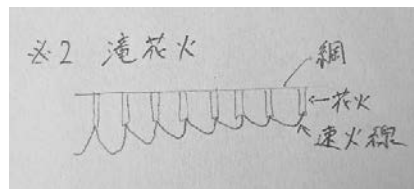


図6

図5の\*3 筑波山の花火(写真13、図7)

綱にランスという明るい色を出す花火を取り付け速火線で一斉に点火する。



写真13

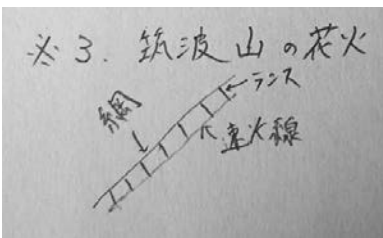


図7

(4) 保存への取り組み

現在、小張松下流保存会の会員は26人で、30代以下の人は9人である。保存会では、会長と世襲制である家元を筆頭に活動している。

地元のつくばみらい市立小張小学校では、約30年前から小張の綱火を「子供綱火」として、5・6年生が体験、学習している。

第2節 高岡流綱火

(1) 高岡流綱火の起こり

高岡流綱火は、1613（慶長18）年高岡愛宕神社の祭礼の日に松の木から大きな赤い蜘蛛くもと黒い蜘蛛が現れて大きな巣を作り、それを見た村人が考え出したとされている。

(2) 現代の綱火

現代の綱火は、8月下旬の高岡愛宕神社の祭礼の日に、くりこみと共にあくまでも祭の余興として、3本の柱と櫓を置き、高さ10mに張った親綱をもとにし、そこへ数本の綱を張り、人形を操る。

綱火当日の夕刻

くりこみ 高岡公民館から愛宕神社へと花火を手に（写真14）山車を引き（写真15）、お囃子を奏でながら練り歩く。

社殿の前に到着すると社殿へ花火をふりかける。（写真16、17）。



写真15



写真14



写真17



写真16

③ 高岡流綱火演目詳細

・ お囃子の種類…三番叟、数え歌、じゃかにくばやし、く  
りこみばやし、

・ 演目の種類…「二六三番叟」、「高岡丸の舟遊び」、「浦島  
竜宮入り海辺の花園」、

などを代表とし、10種類近くある。

① 「二六三番叟」

豊作祈願

綱の操作 8人

口上 (拍子木を鳴らす)

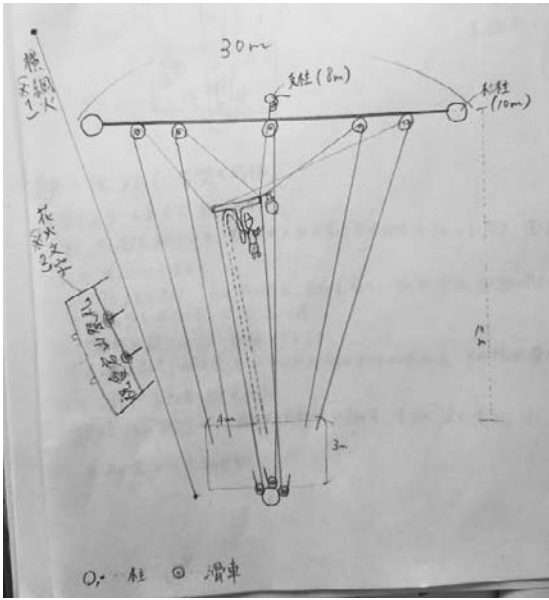


図8 綱の張り方、並びに花火の配置



写真18 実際の様子

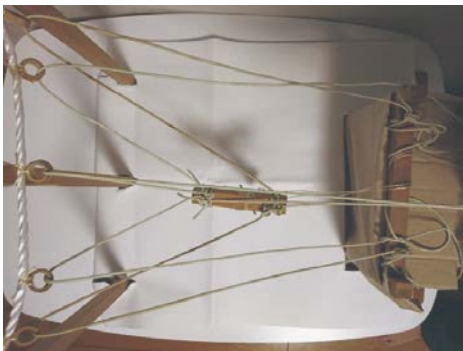


写真19 真上から見たもの



写真20 後方から見たもの

「トザイ 東西 一座高うなれど 不憫なる口上をもつ  
て申し上げ奉る 早速仕掛けましたるは 二六の三番叟  
二六の三番叟 さはさりながら綱先操りの儀に候はば  
仕損じの段 平にご容赦 先ずはその為口上左様 おう  
さんや おうさんや  
喜びありや 喜びありや 喜びあつて 二六の三番叟  
豊年万作  
高岡集落益々のご繁昌 はんじょう このところの喜び他へはやら  
ずと」

図8の\*1 横綱火 (写真21、図9)

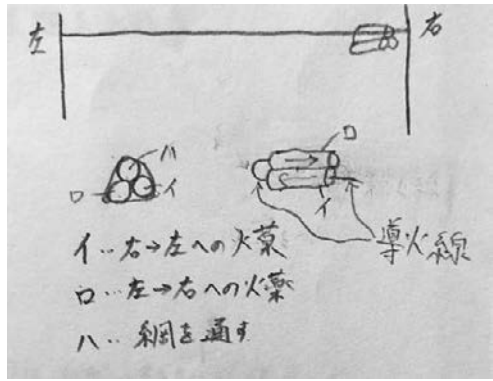


図9



写真21

図8の\*2 花火文字 (写真22、図10)

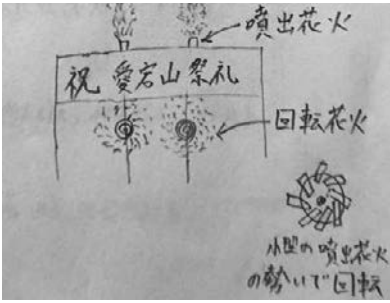


図10



写真22

②「浦島竜宮入り海辺の花園」

舞台から亀に乗った浦島太郎が出てくる (写真23)。

竜宮城に近づくとき、扉を開けて乙姫が2人出迎える (写真24)。

浦島は亀から降りて、乙姫と共に、竜宮城へ。竜宮城から花火が上がる。

浦島が乙姫に送られて出て来る。待っていた亀 (写真25) に素早く乗る。

これをもう一度繰り返す。

綱の操作11人 (亀7人、浦島2人、乙姫2人)



写真23 亀に浦島が乗っている



写真24 乙姫が出てくる



写真25 浦島の帰りを待つ亀

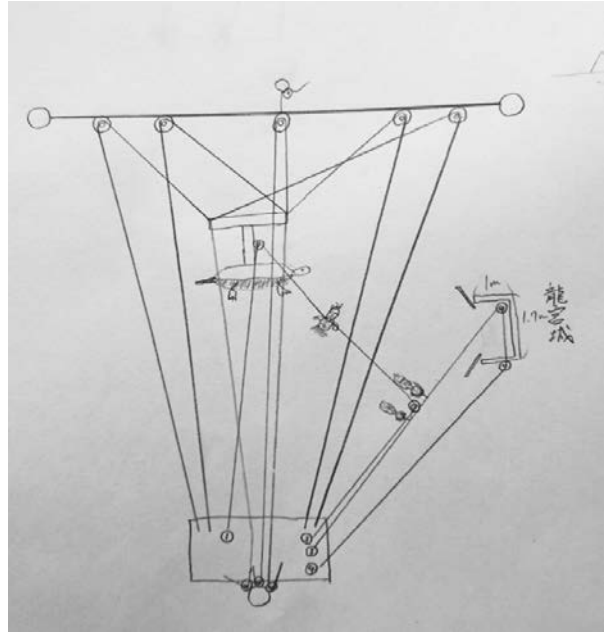


図11 綱の張り方

## 図11の説明

基本の操り方で浦島が亀から落ちないように①を張りながら、1周する。(この間に亀の花火がカラフルになる) 亀を中央に持っていき、④をゆるめ、③を引き乙姫を出す。(扉を開ける)

①をゆるめながら②を引き、浦島を乙姫のところへ。

①②③を張りながら、④を引き竜宮城へ入る。(扉を閉め、花火点火)

(扉を開く) ③を引き、浦島と乙姫を出す。②をゆるめ、

①を引き、浦島が亀に乗る。

(4) 保存への取り組み

現在、高岡流綱火更進団の会員は25人で、任期2年の会長、副会長を中心に花火・人形・お囃子などの係にわかれて綱火を保存している。

しかし、地元の小学校などで指導などは行っていない。

### 第3節 葛城流綱火

(1) 葛城流綱火の起り

葛城流綱火の起源については、1659(万治2)年三峯神社の創建に当たり火祭りを行ったのが始まりとされている。戦後、中断している時期もあった。

(2) 現代の綱火

現代の綱火は9月13日以後の日曜日に、茨城県常総市の一言主神社で大塚戸芸能保存会によって行われている。

綱火会場広場には、備え付けの柱や櫓がある。その為、小張松下流や高岡流とは違い、半月前頃から綱を張り、練習をすることができ。

午後7時30分 練り込み↑伊奈の綱火ではくりこみと呼んでいるものをこちらでは練り込みと呼ぶ。花火は手にせず、

獅子舞が乗った山車とお囃子を奏でながら、一言主神社の境内を練り歩く。

### (3) 葛城流綱火演目詳細

- ・お囃子の種類：練り込み、三番叟、鳳凰の舞などのお囃子が伝わっている。
- ・演目の種類：「三番叟」、「鳳凰の舞」、「安珍と清姫」など計67種類に及ぶ。



写真 27 三番叟の衣装



写真 26 三番叟の構造



写真 28 実際に演じている様子

### ① 「三番叟」(写真28)

綱の操作 7人

口上

(拍子木を鳴らす)

「東西、東西、サテ東西。サテ御免を蒙りまして、棧敷上にて不便な口上を以って申し上げ奉ります。各々御見物の御方様、御気嫌よくお揃い遊ばされ、目出度く恐悦至極に存じ奉ります。従いまして大塚戸一言主神社、並に三峰神社、大塚戸一言主神社、並に三峰神社、大塚戸芸能保存会主催にて、煙火興業 仕

候段。  
東西、東西、サテ東西。サテ御目通りにしつ

らい置きます糸からくりの芸題也。  
大万灯にある通り、『演目名』何を申しまし

ても綱先きのことなれば、当れば一人のお慰

み、外れればお笑いぐさ、悪しき処は数山々

なれど、悪しき所は袖や袂に隠し置き良い所

はおそばからおそばへ良いと一層の御ひい

きを一重に十重に願ひ上げ奉ります。  
東西、東西、サテ東西。サテこくもと初回勤



れます様、まずはそのため口上御披露。」

② 「大万灯 鳳凰の舞」

綱の操作 4人(万灯回す 1人、鳳凰 3人)  
 万灯(写真30)に火が灯され、上部の傘の部分に点火すると、綱を引き万灯を回転させる。しばらくすると、鳳凰にも火が移り、鳳凰が花火を散らしながら、空高く舞う。すると、地上10mほどの高さにある、滝に点火され、非常に幻想的な鳳凰の舞となる。

口上については、  
 1幕目にまとめて  
 言っている。

(4) 保存への取り組み

大塚戸芸能保存  
 会は、社会人も参加  
 できるように開催  
 日を土曜日に変更  
 したり、綱火の練習  
 日を設けている。し  
 かし、地元の小学  
 校での指導は行っ  
 ていない。

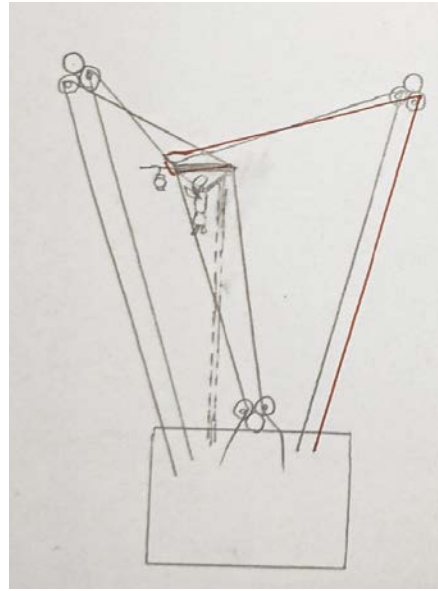


図12 綱の張り方

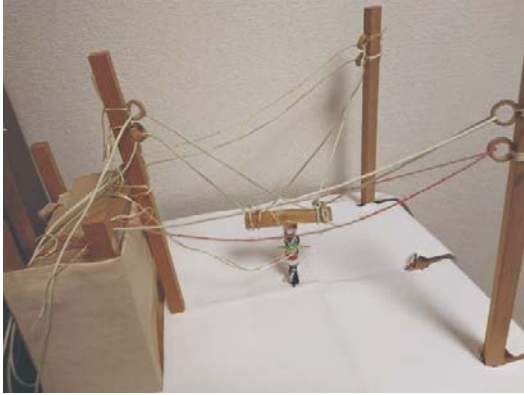


写真29 後方から見たもの



写真30

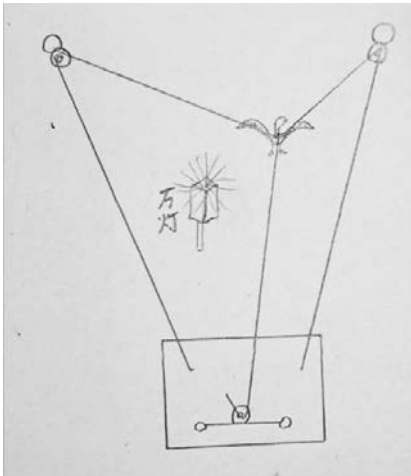


図13 綱の張り方

## 第4章 宮本流綱火

### (1) 宮本流綱火の起こり

檜戸流綱火が人手不足で消滅したのではないかと知り、このままでは他の流派でも、同じようになることは十分にあり得ると思ひ、今まで趣味として、ほぼ一人でやってきた宮本流を応用すれば、たとえ一人になろうと伝統を守っていけるのではないかと感じ、さらに改良を進めた。

### (2) 宮本流綱火の技法

#### 1. 舞台

高さ4mの柱を建て、対面に綱を操作するための舞台を用意する。

舞台は、金属製の常設のものを用いている。

口上並びにお囃子は、演目や流派に合わせて実際の音を録音し、カセットテープで流している。

#### 2. 演目

「二六三番叟」、「舟遊び」、「浦島太郎」、「桃太郎」、「牢破り」、「那須与一扇おうぎ的まと」、「鯉の滝登り」、「空海くわかい龍りゆう伝説でんせつ」、「安珍清姫日高川道成寺」などの既存の演目を改良すると共にストーリー性を重視するために一部変更を加えた箇所がある。



写真 31 麻縄



写真 32 杭 各滑車 綱を通すためのリング

#### 3. 綱火実施にあたり用意するもの

麻縄あさなわ（写真31）、藁縄わらなわ、ロープ、マイカ線、木製滑車かつしゃ、金属製滑車、プラスチック製滑車（写真32）、人形、衣装、頭、柱類、太鼓、大道具、小道具、文字仕掛棒、提灯、幕など。

#### 4. 宮本流綱火の発展と基本の綱の張り方

##### a. 初期

木の装置に鈴を付け、それをロープに取り付け、車の荷台からロープを引いて楽しんで来た。これは、木の装置を後ろに下げる動きしかできなかった。（図14）

b. これを二年近く続けていると、近所の人が滑車をく

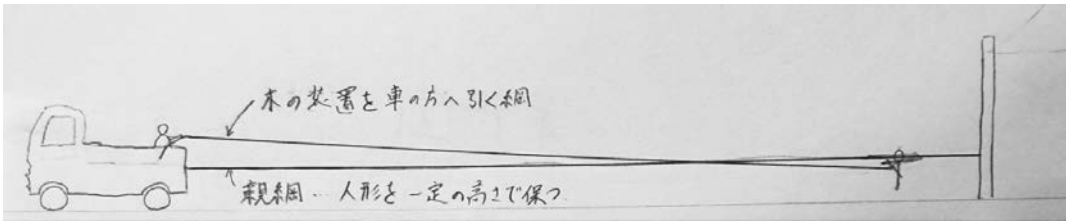


図 14

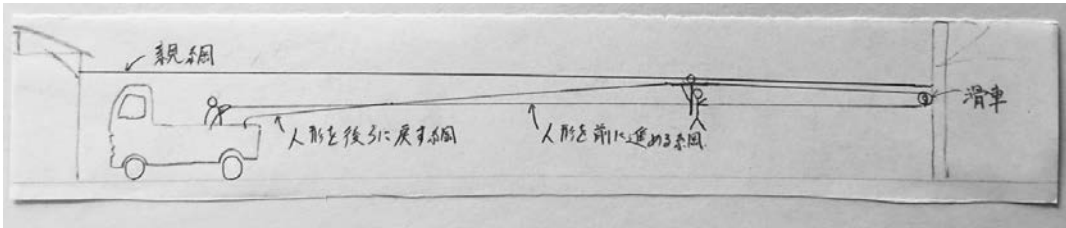


図 15

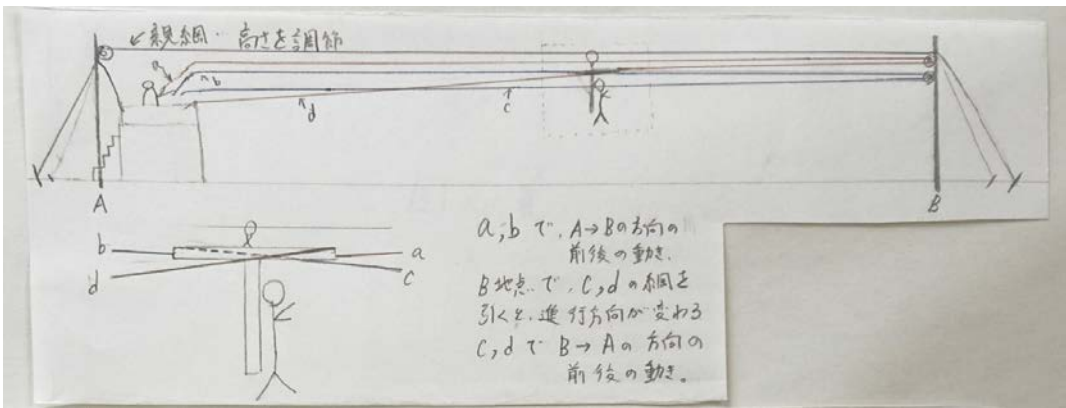


図 16

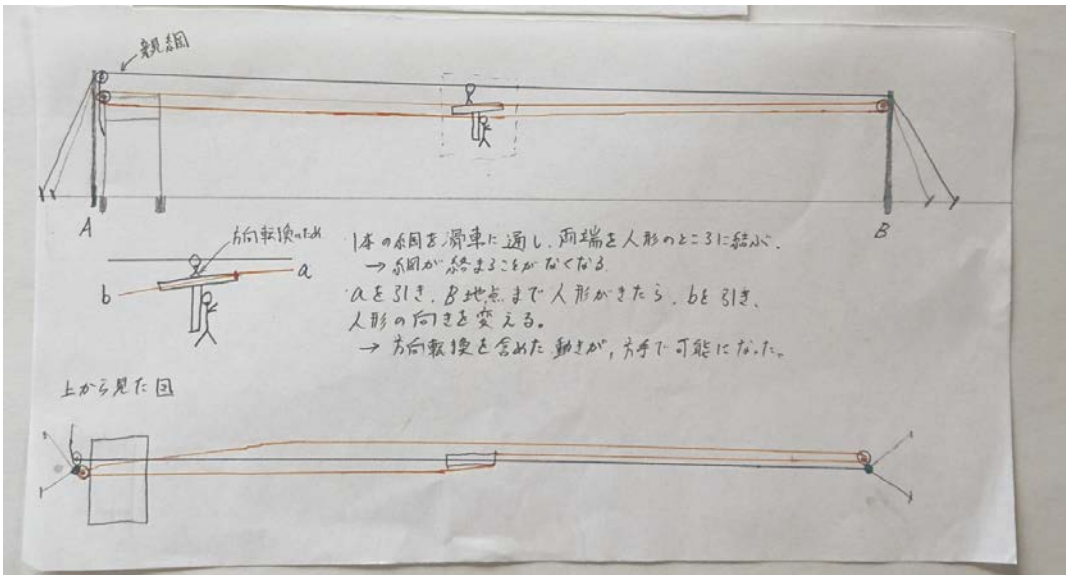


図 17

れた。これにより前後の動きが可能となった。(図15)  
この頃になると物事が段々と分かるようになり、人形を用いるようになった。

c. それから3年経った2009(平成21)年、母の手作りの鯉のぼりの披露を兼ねて、母の実家にて、鯉のぼりを使った演目を行った。このときに祖母が皆を楽しませる為にナイアガラ花火をやっていた。その後これを参考にし、花火を用いる様になり、名実共に綱火となった。

しかしこの頃の綱火は前方へ進み、そのまま後ずさりするように後ろへ戻ることしかできず、何とか向きを変えて、常に進行方向に顔が向いているようにできないかと模索する日々が続いた。そしてついに2014(平成26)年にそれは実現した。これは、とても良い技法だったが、綱の本数が増え素人が操作するのは不可能な上、前後させる為に両手が塞がるので、人形のからくりを操作できないという難点があった。(図16)

d. そこで、再び研究し、2018(平成30)年に新しく考案した。これが、現在の綱の張り方の基本となっている。(図17)

5. 演目・綱の張り方詳細  
①「二六三番叟」(写真33、34)

- 1) まずA↓Bの移動のために、aの綱を引くと人形はbの方へ進む。(図18)
- 2) Bに着いたところで、bを引くと、人形が方向転換してAの方へ向かう。
- 3) Aに着いたところ(写真35)



写真 34



写真 33

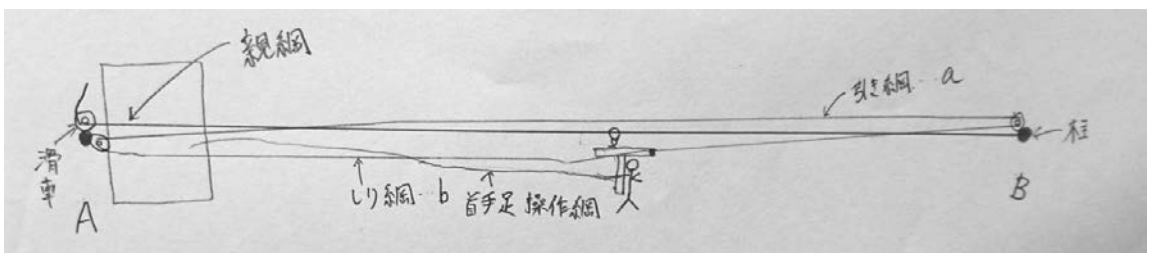


図 18 操り方



写真 36



写真 35

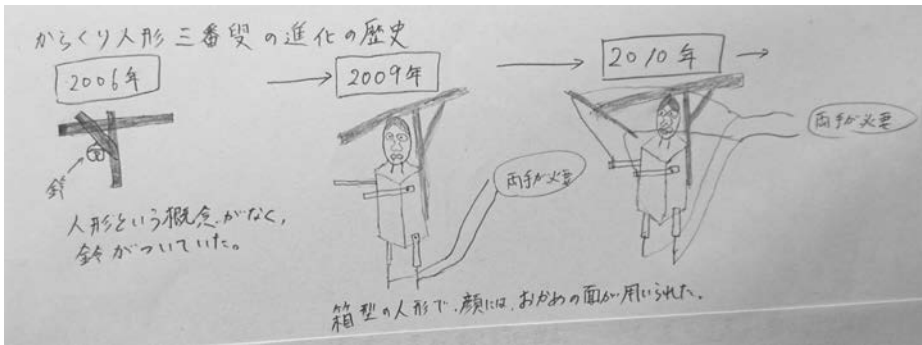


図 19 三番叟の構造

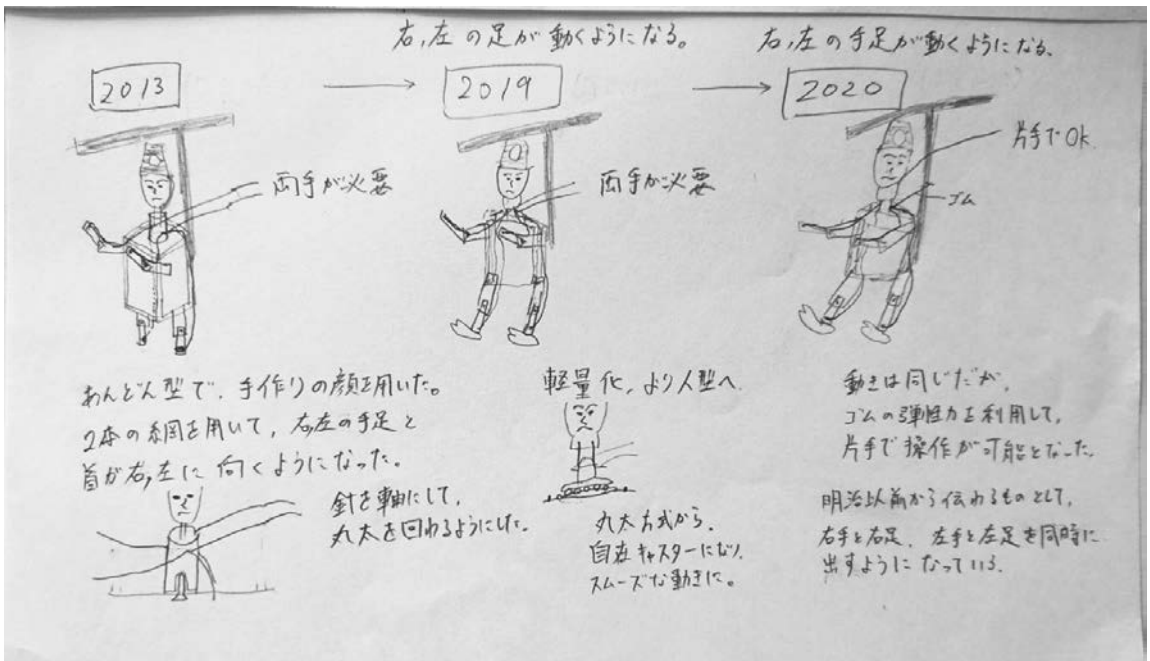


図 20 三番叟の構造

4) A ↓ B、B ↓ Aの動きをしている間に、手首足操作綱を引くと、手首足が動く。で、aを引くと、再び方向転換をする(写真36)ことが可能。



写真 39

1本(+手足首1本)の時の三番叟



写真 38

2本(+手足首2本)の綱が必要



写真 37

4本(+手足首2本)の綱が必要



写真 41



写真 40

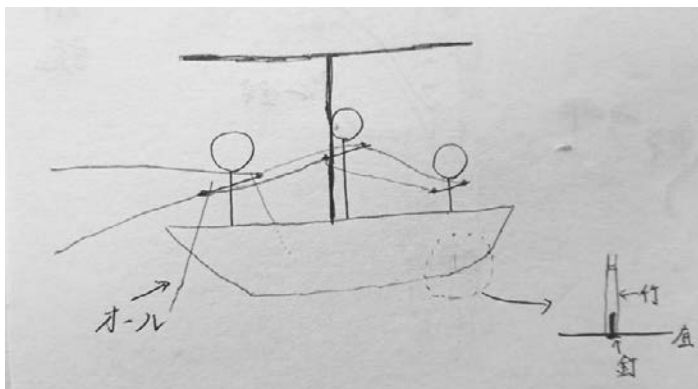


図 21 舟遊びの構造

②「舟遊び」(写真40)  
 以前の人形(写真41)は、細い竹で骨組みを作り、船底から釘を出し、竹の中に入れ動くようにした(図21)。三体の人形の右手は右手、左手は左手とつなぎ、同時に動くようにしていた。  
 現在では、船内に丸太を取り付け(写真44、45)、丸太が回転することで、丸太につながった綱により、人形を動かす(写



写真 43

船頭は、倒れたり、起きたりして櫓を漕ぐ様子を再現。



写真 42

一番前の人と二番目の人は反対の動きをする。



写真 45



写真 44

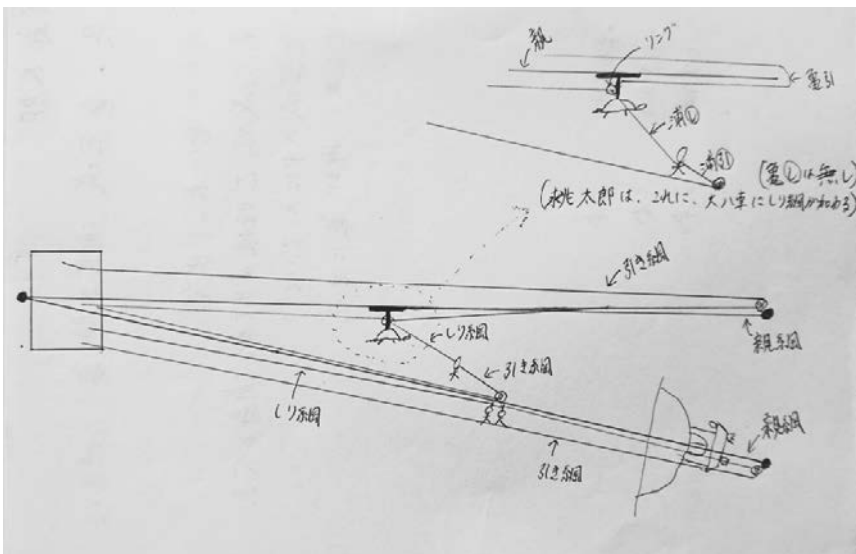


図 22 綱の張り方

真 42、43)。

③ 「浦島太郎」

- ・ 浦島が亀に乗って出発 (写真 46 ～ 49)
- ・ 竜宮城から乙姫様が出てきて (写真 49) 浦島



写真 49



写真 46



写真 50



写真 48



写真 47



写真 51



写真 52

## 第5章 まとめ

### (1) 綱火の保存の現状について

通常は25人必要な綱火も、工夫次第では、1人で行うことも、可能であることが、検証により証明された。

ただし、理想は現状の3流派をきちんと伝承していくことである。しかし、現状の保存方法を調べたところ、映像として準備から公開までの様子が記録として残っているのは、茨

- ・と会う(写真50)。
- ・竜宮城の中に入っていく(写真51)。
- ・出てきて、再び亀に乗る(写真52)。



城県教育委員会が保管する、昭和の時代の8ミリフィルムのため、現在では確認することは容易ではない。その為、早急に準備から片づけの様子を映像として記録する必要があると感じた。

## (2) 今後の課題

ほかの地域の事例<sup>iii</sup>を見ると、無形の民俗芸能の保存は、そのままの形で保存させることが困難であるため、映像記録が広く用いられている。

そこで、つくばみらい市市役所に問い合わせたところ、「記録の必要性がある事は十分理解しているが、実際に行うとなると費用の面などで困難である。」との回答を得た。

伝統芸能を継承していくためには、人員の確保や保存の整備が欠かせない一方で、観光資源として、地域に活気をもたらす面も大いに関係がある。しかし、綱火は国指定重要無形民俗文化財となっているにもかかわらず、知名度が低く、未だ全国に認知されているとはいえない。そのため、今後はどうのように観光と結びつけていくかも課題となる。

首都圏である茨城県でさえ、伝統芸能の継承に警鐘がならされているのだから、全国的に見たら、名前も知らない地域で、悲鳴を上げている保存会や地域の人々がたくさんいるのだらうと想像できる。このままでは、日本に古くから伝わる、

素晴らしい伝統芸能が失われてしまう。

これは時代の流れだから仕方がない、神の見えざる手がそうしているのだ、と言う人がいるかもしれない。しかし、先人達が幾多の困難を乗り越え今日まで残してきた素晴らしい伝統芸能が消えるということは、先祖や過去の人々との対話が途切れることを意味しているのではないか。いわば伝統芸能とは、過去との対話であり、これを読み解くことにより、当時の人の思想や世界観を感じることができ、このことは、様々な学問にとって、重要な情報ではないだろうか。

i 宮田誠治『小張松下流綱火』1986 p.30-31

ii 伊奈町史 編纂委員会・編集『伊奈の歴史 第3号』1997 p.64

iii 川村清志 民俗文化の「保存」と「活用」の動態：祭りと民俗芸能を事例として 2015

写真	写真タイトル	提供者・撮影者等	ページ
1	昭和初期の東檜戸地区	古地図散歩	41
2	現在の東檜戸地区	グーグルマップ	41
3	移転の石碑	宮本大翔	41
4	くりこみの花火	つくばみらい市	42
5	街道を練り歩く	つくばみらい市	42
6	階段を駆け上がる山車	つくばみらい市	42
7	二六三番叟	宮本大翔	42
8	舞い踊る二六三番叟	つくばみらい市	42
9	上から見たもの	宮本大翔	42
10	大利根川の舟遊山	つくばみらい市	43
11	舟の軒から落ちる花火	つくばみらい市	43
12	滝花火	つくばみらい市	44
13	筑波山の花火	つくばみらい市	44
14	花火を手に愛宕神社へ	つくばみらい市	45
15	山車を引く	つくばみらい市	45
16	花火を社殿に	つくばみらい市	45
17	火花で包まれた社殿	つくばみらい市	45
18	実際の様子	つくばみらい市	46
19	真上から見たもの	宮本大翔	46
20	後方から見たもの	宮本大翔	46
21	横綱火	常陽リビング	47
22	文字花火	つくばみらい市	47
23	亀に乗る浦島	つくばみらい市	47
24	乙姫が出てくる	つくばみらい市	47
25	浦島の帰りを待つ亀	つくばみらい市	47
26	三番叟の構造	宮本大翔	49
27	三番叟の衣装	宮本大翔	49
28	実際に演じられている様子	一言主神社	49

29	後方から見たもの	宮本大翔	50
30	大万灯	一言主神社	50
31	麻縄	宮本大翔	51
32	滑車類	宮本大翔	51
33	二六三番叟	宮本大翔	53
34	二六三番叟	宮本大翔	53
35	前へ進む二六三番叟	宮本大翔	54
36	舞台の方へ戻る二六三番叟	宮本大翔	54
37	2013年の二六三番叟	宮本大翔	55
38	2019年の二六三番叟	宮本大翔	55
39	2020年の二六三番叟	宮本大翔	55
40	舟遊び	宮本大翔	55
41	以前の舟遊び	宮本大翔	55
42	三体の人形の動き	宮本大翔	56
43	三体の人形の動き	宮本大翔	56
44	舟内部の丸太	宮本大翔	56
45	舟内部の丸太	宮本大翔	56
46	浦島太郎と亀	宮本大翔	57
47	花火を使用した様子	宮本大翔	57
48	花火を使用した様子	宮本大翔	57
49	竜宮城から乙姫が出てくる	宮本大翔	57
50	浦島と乙姫が会う	宮本大翔	57
51	竜宮城に入る	宮本大翔	57
52	再び亀に乗る	宮本大翔	57

図	図タイトル	作成者	ページ
1	茨城県白地図一部改変	『わたしたちの茨城県』より	36
2	つくばみらい市地図一部改変	『わたしたちのつくばみらい市』より	36
3	明治初期の楯戸地区地図	古地図マップより	41
4	二六三番叟 綱の張り方	宮本大翔	42
5	大利根川の舟遊山 綱の張り方	宮本大翔	44
6	滝花火	宮本大翔	44
7	筑波山の花火	宮本大翔	44
8	二六三番叟 綱の張り方	宮本大翔	46
9	横綱火	宮本大翔	47
10	文字花火	宮本大翔	47
11	浦島竜宮入り海辺の花園 綱の張り方	宮本大翔	48
12	三番叟 綱の張り方	宮本大翔	50
13	鳳凰の舞 綱の張り方	宮本大翔	50
14	宮本流綱火 綱の張り方 a	宮本大翔	52
15	宮本流綱火 綱の張り方 b	宮本大翔	52
16	宮本流綱火 綱の張り方 c	宮本大翔	52
17	宮本流綱火 綱の張り方 d	宮本大翔	52
18	ナイアガラの滝の構造	宮本大翔	53
19	三番叟の構造	宮本大翔	54
20	三番叟の構造	宮本大翔	54
21	舟遊びの構造	宮本大翔	55
22	浦島太郎 綱の張り方	宮本大翔	56